

全勇
傳婦

繪本史料紙

初編

卷之四

遠 13
977
4



3巻 977

本草

本草

勇婦繪本更科草帑卷之四

遠州小夜中山麓 栗杖亭鬼卯近

横田道安加賀國菊酒屋小仕ふ話

漢書曰吹毛求疵誠多うか 先年牧島大九郎小頼

更科とよろー野外へたびきつるー横田道安ハ

途中より逃之アー其日ハ騷動大うさうさうこれ皆

道安が仕まごなりと 樂岩寺右馬之助大ふいふり州派

今つきたづひまきバ今ハ信州も住居うらひさうか

加賀の国へ逃のれ多きと猶も姿とく還俗一名

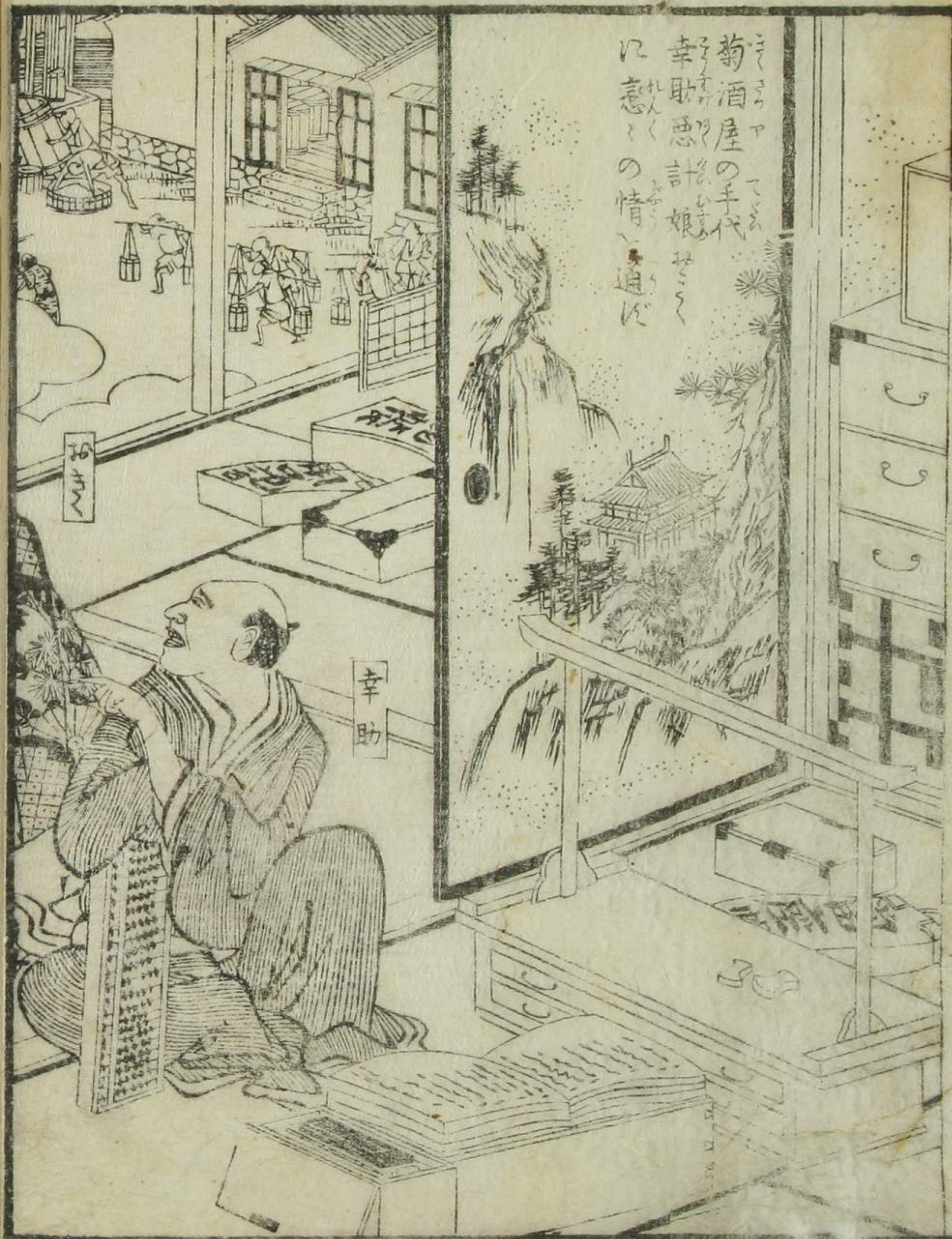
と幸助とらうもめらうとこわうとさうと中 大聖寺

富樫の城下以酒屋らう菊亭とらう代々福育の家

勇婦繪本

幸助縁とてこりり此家小奉公一今ハ番頭殿まで
 下手なる医者より増えんと心と安
 んト下り此家小お菊とて一人の娘なり其姿
 の醜きと額面の頬先山のどく出る鼻筋ハ
 こゝ眼ハぐれく口廣く三平自満の娘とて受取
 次女なりとて不器量も親ハ十人ほどとゆひ
 財のつふまう花やうの家衣裳苗木空炷などえな
 らぬ琴三味せんも教へられど元来不器用で一
 もゆいえび鮎手のどけ手とて岡崎女郎衆と三
 こゝアとてやがえざれハ師匠の警女も騰とつが
 子れども男とてとみく誰ハ色くろ一彼ハいろハ白と

こゝこゝ小男なりどちと比難一て智と
 やらび聾也酒家の福有なりて来らんと媒とりて
 言入ぬまど娘とてハ返替一とまは空一光陰
 過一々此おとく十八才のころまは縁遠けれハ次第
 小聞とて一今ハたとくむくつけ男とてつひ
 返事又んものちまこの手代と眼とり通トけ
 まても彼がはやしに眼一見一見ハハ吐
 あらハハふら甘二日も枕上らざれが誰これと
 よとて娘ハかくとてはねハ主従の義とゆひて
 返事とて名意と上下ハたのめとて獨あふ小
 々々爰不道安幸助今ハ番頭殿も用いら



はくくやみやう 頼信州おろく時ハ殿の典蒸と
 栄花ふらうらうらに今ハやうく 酒屋の手代
 おろくやうり 一生と過らん口とさきみり此家乃
 娘假令かつの草鞋とさきみり 智とたづぬるもろ心
 うふく 汝我れとさう 妹脊のかさういとうさバ自
 然と聳おろらんハ案の内より 聳とらりて 金銀は
 我よのとさう 折と見合せ 我秘法の毒茶さくむさ
 さうび親もとも 殺さう 日本一の謀なりと夫より
 娘おろくが店へ出るさうび袖を引 慮くの情と通
 どもしおさきも 関さう 死さう 幸助が心ゆさう
 男がうハおくていられど 鼻のさうれおかりしるわさうら

い落人 気色うりさう 此時節まてハ上代さう 意さう
 らの先歌とさうさうつらハ 女も送哥とさう 其後
 達事と約さうさう 何れぬさう 幸助終お哥とさ
 うさうさうさう 大おさう 何れぬさう 古哥とたづ
 うさう 送らんさうと心とさう 何れぬさう 本の端さ
 我出を極のトさう 古え結 逢取らげてゆさうのさう
 幸助此哥と見く 屈竟の意 哥さう 其らさう 短冊
 うのへ 忠筆とさう 娘おさう 待らさう びさう
 幸助が魚さんと店へ立出さう 何れぬさう 何れぬさう
 ろけさう ばうの短冊と振袖の中へさう 入さう 娘さう
 白赤らう 何れぬさう 何れぬさう 眼さう 幸助とさう

眞婦全傳卷之四

五

既すでに啞吐やどせんと胸むねまぎらつさうけーが胸むねをば
 手紙てがみを振袖ふるそでとせよ人ひと家心いへこころを其奇そのきの通とほり
 かきつべし返えし寄よむとせよとせよいあまうさうら
 見みやりける玉たままといふ家部屋いへべへわたり取と
 手てもゆくの短冊たんぱくを印しるしさうらに鬼神きしんとも和なく
 る名寄なようれば且悦かつ且かつうけしとやく返えし寄ようん
 とせよ人ひとども是これまじく三十一字さんじゅういちじのりハこそせよ竹たけ
 雀さくのくもくもくぬ身みなればいふせんと節用集せつようしゅうと
 取とりて世返よへん寄ようらぶき寄ようらぶきとたづねしに
 本もと九くの火ひ三さんつつの山やまおち一ひとつ七しちつつの金かねと水みづをせよらま
 是これ屈まが竟まの返寄えんかりと金地きんちよころう摺すりしんぞうり

出でし蚯蚓こうり比ひのころりーどくい認た店てんへいてくれはらうり
 小人こじんもきく幸助きんすけ一人ひとりのねまひ魚ういようらつたればお菊きく
 心こころよりやうらの幸助きんすけが帳箱ちやうちやうをむけしけりいゆるる面おもて
 瘦やせらるゝいな家いへを心こころよりゆへん可か愛あいのそれ
 巾きん短冊たんぱく首くびをらへし入いやうく部屋いへへと逃にげ入いる幸助きんすけ
 してハ謀成まうじやうらうとたんぞくはいられたれば憲けん寄よもい
 らねどセツのいひと五水ごすいをやうあまことちまはるてハ今宵こんせう
 セツの鐘かねと相あひ図づを忍しのへとのりやうんと心こころよりなりの
 其その刻限ときかぎもなかりーハ裏うらより飛石とびいしづいよまはら
 くれはおきくハ待まちまじ山やまと声こゑからる幸助きんすけも其意そのい
 とさうり川かと答こたへくれはおきく心こころうれしく切戸きりど押お開ひき

錦繡の国福入り家鴨連理のからいきりとれど
ねしけり

お菊幸助加賀の国と立退話

世に小意不どせのなるあのハらト始ハつくをなす
災夜もむり寐をせ一仇人も今ハ命も何ッ人や
親もからの目とまのいやささるあのねといも憎ららし
ぬるあどり々おう幸助も向漕がうれあい
かさり々謀ふせ一意天の白女も西施小町のどく
やりいらなかつとらげを多れ此やハいハめハ知る
人もりり一に手代下女も其噂のいいらし幸助
が物好今足利家二名々相阿弥もやらぬ茶人ら

うらりいいい叫ぶいい番頭忠兵衛肩といらしいまいま
知耳君之定らぬ一人娘ハ不我の悪名らりて世家の
の名とまなりと天小怒り幸助と請人大助といふ
このに急度らはけきび一番派つけ々れ菊酒
屋の親くもいらの不義と憤一間所小中一
込まいま桑の岩橋うらをえく達ふとかえらけれい
む幸助がいらり今ハ画餅とかり口免と娘二金も
ぬもませ此所とエのいららば殺一金とり
何国へなりも立退がやとやり人も其言やる便
えんらら受人の方おしる一月日と送るをいふ
むとんせくハ下女と密にかけらぬみことくとまりの

幸助く人送るる其みうと所詮親くの怒りなむ
 多き此世くハとむいどるものくけまバ一緒死人
 とぞ書りける幸助ハ頭とくれうふ女と心中して
 物笑いけるやちぬふう金とぬとまふふうく
 たりと返りてと書り下女ふりてけるせうハ
 むじき見ふふりける金二百兩じり盗出—ころ
 まじり来てふ故郷信州へゆきくなく契るべ—
 とらてくれバ大およほ何とぞ金二百兩とぬとまん
 や心とくれけくよ或日他所へ返り—金二倍も
 筆筒へ入るはくもれ傍に置るは天のりくとぬす
 たり其夜と—の着くなど風呂鋪にこみ一夜に

まじり幸助が方へ来てくれバ幸助もろこむ密に請人
 の家とまじり出其夜ハ兩人山奥へ逃込人まじり深谷
 小二三日ありくおど酒屋ハ其夜むとまじりハ
 騒立追く追人とまじり幸助が方むとれ—と大助
 方へ人とまじりらせくおよ是も欠落—と狼唄騒
 ぐ所へ酒屋の使まじりぬるお扱ハ兩人言合で欠落
 り—お相違な—と上方街道東海道の出口くハ
 人をつけやとつへども山奥よ志のびぬまバ終ふまじり
 酒屋まじりむとむいさめなれば親くのかる—と
 まじり親の欲目ふ十人なるとせり人バ幸助が不苦
 なる男ふりふたむも悪縁なりされど金と盗



幸助



幸助おき
 ついで甲州へ
 みのい

おき

仕合しあひより引ひききと下知げちするふぞ幸助かたけ大ふゆか
くも弱よわくを見みてハハリハハリハらんハと一腰ひとこし一打ひとうち
この北海道ほくたうハ物騒ぶつそうと云いわは合点がてんの二人旅ふたりりょを
さし出でる出でて出でて出でて出でて出でて出でて出でて出でて出でて出でて出でて
ひよふとくきなり郡内ぐんないの弥惣やそう嘲あざわらふは汝なんぢが二百兩にひゃくりやうの金
をもち此所こゝハ五日先ごにちまへより知しつゝ火暮ひぐれが落おち
より細こまとより待受まちうけより心こゝろよくわきまをさしといふとへん
兩人ふたりも脊骨せぼねより骨ぬきほねぬきより酢すとくけく喰くへん
といふは垢かきくハ色いろあをぢりわはハが肉にくの多おほきまを肌存まぶたお
けり命いのちふゆる宝たからハるた人裸はだかくハるてもゆき
ろくハいとりと金かねも着物きものもものりり湯ゆり一ひとつ

身みハりり出でる出でる幸助かたけやろき夫おつとやハハとかけ
よぶと引ひ摺すりんど後手あつちふがいと上うへ己おのれ憎にくみやつ婦め
人ひと入い覺悟かくご裸はだかよりくわさ金かねとやら
ろく不屈ふくへきの何なんれ首領くわんりやうの差回さかいお任まかせん女をんなハ神妙しんめう
のふるまひうれば着物きものハ汝なんぢふと二人ふたりと引ひ立たる上うへ
まよと着物きものうらきき金取かねとりりゆを兩人ふたりと引ひ立たる上うへ
上うへへの急いそぎな

更料讐の復讐話

かく郡内ぐんないの弥惣やそう吉田太郎よしたたろうハおき幸助かたけと引ひつれ
立たかつて天目てんめ猿橋さるばしの副将ふくしやうお逢あは二包ふたふくの金かねとわ
今宵こんやハ不量ふりやう仕合しあひなり酒買さけかひ入いると兩人ふたりと引ひつれ

ば天目の鬼丸おまきくが貞ははくくに見る醜婦
 も世ふりるそのうハ其男よりの茶人なりと抄り
 へハ幸助恥しくや有る人某まろく色小迷ひに
 りうび加賀一番の豪家なれば意小事うき金とら
 んといひこれまろく召つまへども運尽く金とらも
 りしりくハ女ハのうやうにうもも彘とハゆすけ
 下されしと涙ながる願ひ多ればおまきハはけり幸助
 が心底を聞忙を果しりしが扱もく腹立や死は
 一緒と言かきしハ空言やまろハも夫お引久く女庭
 訓大学おも二人の夫返さる事ハ女の恥と聞ゆ急こ
 おま一人お身をまろ外おまろハかりとら

くる心根と金ゆ色と仕りけりハらんまりむごいりり
 あくぢげく涙ハ猿橋も浮く流しはくりお程く
 一人立し首領これへ入らせおまと燭臺星のぶくに
 きしゆき二人の副士も頭と下手下ハと居らして
 土お頭と埒しける驚蹕の声とろも小立いづる人そ
 レバ二十二三と覚し容窈々芙蓉の粧い白綾乃
 下着お紫儒子の上着黒き唐織お吉野竜田と縫
 襦袢と著し金作の太刀と女の童ハとてさづ
 くと立し二人おむひせしハ何国の人ふていりる
 みあく多くの金とりち世所まろハさりあひし
 まび語らきとととやうふ述多ればらさくハ世をて

先刻より卅人ぐの首領と宣ふはさるる鬼人
 軟といふやうなるは方なるとやいふまことに公家高
 家の簾中といふも恥しうね頭さるるふををし
 死にまづこのちまゐるよまゝ加賀の国菊酒屋の娘
 おまゝとやまのめと此幸助とや手代よまゝ親の
 金とぬまゝいづし甲府と心づけ忝る道うかくとれ
 いと幸助が不心底まゝ落る語まゝしバ首領打ま
 い其男彼うりま違ひはうたや負と上げよと灯火の影
 魚とまゝ見まゝ汝ハ横田道安よらまゝや幸助
 大おまゝに家実名とまゝまゝ誰人まゝおまゝ
 得と負まゝらまゝめこハ樂岩寺の更料姫おまゝ

やうまゝれ果まゝどかりと更料涙とまゝと涙し扱も
 く汝お達たりとぞ抑承か身とわたり夫森之助屋の
 果まゝいも汝が一心より起まゝまゝ何と命の
 内お汝と一目まゝ百千万のうまゝといまゝとやいふ
 今月今日いうまゝ吉日まゝや夫森之助屋の更料手紙
 引まゝ此所お引連来まゝいまゝおまゝかまゝやかまゝ
 と天と拜し地と禮しまゝまゝ涙ふらまゝバ副将天
 目猿橋ハまゝまゝり手下のまゝれまゝ一圓合点まゝ
 只まゝまゝとまゝまゝかまゝり幸助ハ魂天外へまゝ
 まゝまゝまゝと泣叫まゝかまゝり更料ハ襦袢まゝ
 紅の袴まゝ金作の太刀返まゝまゝまゝまゝまゝ



真如全作卷之四

ありしに鬼丸鬼藤太詞とてらへ首領の仇手とて
 ろふ及ど参りし仰つけとていふに否たおた
 此者の一心より幾百人の命とていふに
 せえり夫の供糧よ我手おつけとての恨と暗に
 登しとてらるれば幸助顔色土のどくやおきき日
 頃のらげりい愛らるぞ首領より命と助られと
 大声のあは泣きけりばおとく、貞と打つて
 こりし金銀とて人とする志は聞て色も意も
 せとありは身の罪は身と責るまうしこれたの
 亡骸とていふよりお菊とてつと白眼とて憎きめら
 我汝とてし一賢とてらる酒屋の親はららる人
 汝とて毒菜とて殺し人とおひしに承運つて
 漸く二百両の金と盗まで汝と道ゆて殺さんと
 一が甲州へつぎゆき人まれば殺さんと承運せし
 念とて大に罵りければ更科とて怒りし絶どがる
 大悪の人と世おらるもの六カの穢れは土やうと
 けきと幸助と足下おふまへゆがへよ手とつけお
 つつ引きれば首はつて捻切きりしむの程ぞ
 らとゆきまおとくはつとまりし憎いとも新披
 ころの馴染とて死骸と泣く傍の土お埋し
 扱首領とてくも席へ立之り此女お答つけ

ありしに鬼丸鬼藤太詞とてらへ首領の仇手とて
 ろふ及ど参りし仰つけとていふに否たおた
 此者の一心より幾百人の命とていふに
 せえり夫の供糧よ我手おつけとての恨と暗に
 登しとてらるれば幸助顔色土のどくやおきき日
 頃のらげりい愛らるぞ首領より命と助られと
 大声のあは泣きけりばおとく、貞と打つて
 こりし金銀とて人とする志は聞て色も意も
 せとありは身の罪は身と責るまうしこれたの
 亡骸とていふよりお菊とてつと白眼とて憎きめら
 我汝とてし一賢とてらる酒屋の親はららる人
 汝とて毒菜とて殺し人とおひしに承運つて
 漸く二百両の金と盗まで汝と道ゆて殺さんと
 一が甲州へつぎゆき人まれば殺さんと承運せし
 念とて大に罵りければ更科とて怒りし絶どがる
 大悪の人と世おらるもの六カの穢れは土やうと
 けきと幸助と足下おふまへゆがへよ手とつけお
 つつ引きれば首はつて捻切きりしむの程ぞ
 らとゆきまおとくはつとまりし憎いとも新披
 ころの馴染とて死骸と泣く傍の土お埋し
 扱首領とてくも席へ立之り此女お答つけ

貞女傳卷之四

十四

加賀へ送りつうとて一とれまじはまうハが側やく召仕
リんと悠くと入れば皆く首領の勇力おゆれ舌は
かみいさうとていふ

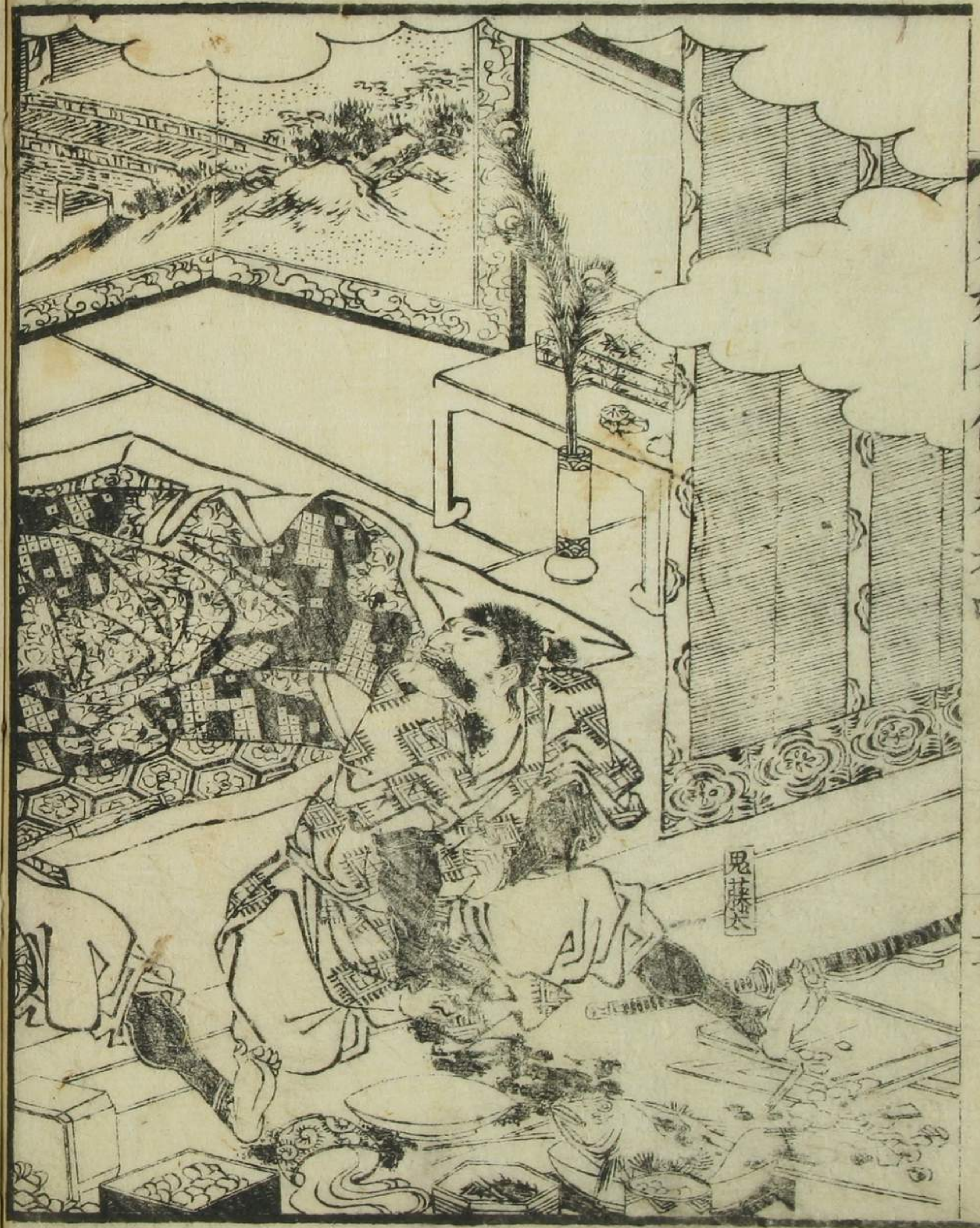
鴉勘左五門本名と明と話

此は天目の鬼丸猿橋とらう招きつて首領三嶋
のお仙と何者と思ひしは村上が家臣相木森之助が
女房をうんとハまうて彼をかく此所おまうるものハ
らさ退身のてのハ終お承も討とり立退べしと
彼と討つらん中く叶いごとく殊お手下のりども
うらつて我いが俵おまうて明日讐と復しうい
賀宴うりと首領お酒とまう其酒お毒と入吞し

毒殺し、まうて承く首領とまうらんハいりて
くれハ鬼藤太打うまづた妙計なり必西人の外人おま
らまうとらうと加へて見は鴉勘左五門眠りて
うらう鬼丸吃と見只今ハ密事とまうてハ彼を
いへんとしは鬼藤太うらうい何と宣ふ彼を
啞聾なり心とらうあまうとらう鬼丸抱腹して
うらつて誠お木も萱も心とまうてハ此謗な
らんお首領へ酒とまう承くも吞さんハハ
受べしはせんといふ鬼藤太くれハ長柄の銚子お
と入加への銚子と常の酒おまうて首領へハ長柄我
い加へと定まうたがいなまうて鬼丸うと手とらう妙

びりく 秘一丈と云ふれける 扱翌日 西入 更科が前
 へ出 作夜ハ不量 年来の 讐と復し 恐惶至
 極 今日ハ 酒と 手下の 酒の どもへ どもへ
 ちる と言 述多 更科 大少 どもへ
 ぞ心 殊 多の 黄金と 得 手 下の 者共
 ろら 賑 酒宴 既 宴 どもへ
 此 時 鉞子 一ツ 鴨 勘 左 門 どもへ
 更科 長柄の 鉞子 一ツ け どもへ
 土器 鬼九 加 への 鉞子 と 勘 左 門 手 取 どもへ
 くれ だん ぶ 一ツ 吞 鬼 藤 太 へ 猿 橋 も 一ツ
 吞 又 更科 へ 三ツ 目の 土器 と 勘 左 門 持 長柄の 酒

とつ 鬼九 顔 色 俄 どもへ
 や 鬼藤 太 も 目 絶 どもへ
 より 鮮 血 走り 空 と つ ん どもへ
 一 誠 善 と 善 報 どもへ
 悪 報 どもへ
 越 後 国 長 尾 輝 虎 の 寵 臣 箕 田 五 良 左 門 第 同 田
 五 郎 守 虎 と 主 人 輝 虎 此 所 と 岩 どもへ
 甲 州 と 踏 つ ぶ さん と 講 盗 賊 の 拙 と 成 て 思
 ふ ま 此 者 ども 責 ども 安 ども 晴 信 方 へ 聞
 ろ 却 災 と 引 出 と 基 ども 汝 立 越 謀 と 以 賊 と



身如金作巻六四

かりほし岩とらんべしと主人の仇徒と受け啞聾と偽り
 入込し小近頃三島北仙と名乗く入来る曲者と何者と
 とらぬし見るち村上の忠臣相木森之助の室と相扱ハ
 彼も武田と恨る人なれば俱く謀とめぐるさんと子りさうら
 此悪漢ども首領と害でんと毒酒ととめく謀る我れと
 志しゆ人長柄とハ常の酒と入加への銚子に毒と入り人
 一ゆり巴か謀巴小帰しとゆり心地とゆり心と白眼
 めりさぬ威ららしく猛く勇氣アんととえふさる天目
 猿橋とれと聞くと大お怒り扱ハ啞聾ゆふ計られさる
 死手の道連召つる人とよめゆれさる討と加ると右と
 左へ切倒し更科よいふさそく婦人ハ甲斐とくく夫

の仇と移しいあし殊勝さよこれより豕も一肘とちりて
 馬場美濃守晴信とも責亡し婦人の存心と立すべし
 い系手下のこれどもこれまでの通で豕くふさるふいふ
 くといひなれば吉田太郎郡内弥惣伊澤の鉄平とさ
 とも仰らやみよふ骨砕身しては力とありし
 べしと勇しくいひなれば更科ハさるさるさるさるさる
 不絶ばかり英雄豕と助むりさる偏ハ八幡大菩薩
 の加護さるん何とぞ力と合せ美濃守と討せしむへ
 とさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 ば気づくさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 足とも豕まき韓信長良が謀とわがしし身の仇と

討セヤベリと云れりやと云く三島のおらん鴨勘左門
あつう盗賊の首領もつと互ふかく約束し手下
の者どもと商人のどく出立せ甲府へつらりしと云
伺せり

繪本更科草帝卷之四終

